

中部の

# エネルギーを 築いた

# 人々

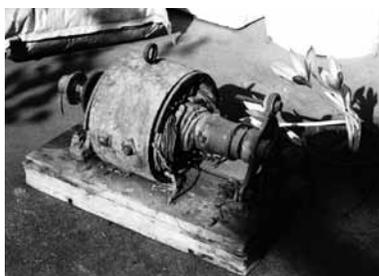
独学で電機工場を興した

岐阜県電気事業の先覚者 篠田義彦

岐阜県電気事業の先覚者、篠田義彦は、明治22年2月、篠田伝左衛門の三男として稲葉郡芥見村に生まれた。弟敏司は事業のパートナーで映画監督篠田正浩の父、兄頼治郎は書道家篠田桃紅の父である。義彦は技術への関心が強く、岐阜中学時代は通学の帰途、岐阜電灯の発電所(今川町)に立ち寄って眺めるのが日課で、時には作業を手伝ったりした。中学3年の時には独力で発電機を製作した。中学卒業後、明治40年、芥見の自宅に篠田電機工場を開設、弟敏司も中学卒業と共に加わった。明治44年には、近くを流れる各務用水を利用する自家用の水力発電所(2 kW)を作った。昼間は工場の動力に使い、夜間は村内に電灯を供給した。時の文部大臣小松原英太郎が岐阜視察のうちに工場を訪ねて激励したこともあった。しかし大正元年、大風被害に遭い応急修理を試みたが、岐阜県知事は発電所の閉鎖を命じた。各務用水の利水手続きや電灯事業経営に正規の許可を取っていなかったのが原因であった。篠田工場は動力源を失い、工場を岐阜市殿町に移転した。



篠田義彦  
篠田貞子氏提供

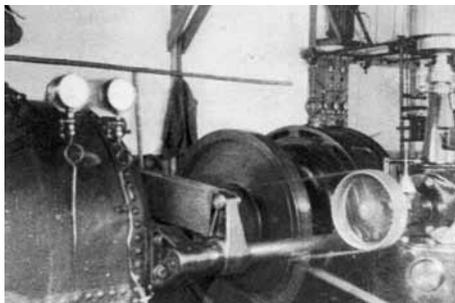


16歳の時製作した発電機  
高橋伊佐夫氏提供

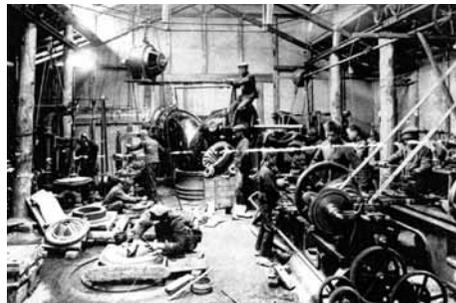
## 小規模水力の建設

篠田電機工場は、電気機器・原動力用水車製造を業務とし、小村落の水力電気創設に貢献した。同社が関わった事業は、次のとおり、10kW以下の小規模な直流発電所が多い。

大正2年4月 加茂郡加治田村、村営川浦川発電所(直流6 kW)設置  
大正3年6月 益田郡小坂町、製材業住幸謹川井田発電所(直流6 kW)設置



芥見発電所内部  
篠田貞子氏提供



大正時代の篠田電機工場(タービン水車製作風景)  
篠田貞子氏提供

大正3年8月 郡上郡上之保村、白鳥電気  
白鳥第一発電所(交流15kW)  
設置

大正4年3月 加茂郡西白川、白川水力電気  
白川発電所(直流12kW)設置

大正4年11月 長野県茅野市、湯川水力電気  
湯川発電所(直流6kW)設置

このほか、美濃電気軌道開業(明治44年)に際して関市小金田の変電所工事に携わったり、下呂町今井家の自家用発電所の設置、山県郡加野地区の揚水水車・発電機の設置、益田郡下呂町の国道41号線沿いの保井戸トンネル(水力発電を原動力にして鑿岩機使用)も手がけた。

## 佐見川発電所の建設

篠田義彦の関わった水力事業で最も大きかったのは佐見川水力電気である。大正2年11月設立の同社は、岐阜市の大口工場への送電を目指したが実現せず、規模を縮小して金山町初め5町村に電灯を供給する会社として再スタートした。篠田電機は発電所の設計・工事などを担当した。第一発電所(当初20kW、その後80kWに増設、設備は篠田電機製、昭和16年廃止)は佐見川が飛騨川と合流する加茂郡白川村白川に設けられ、大正5年10月に運転を開始した。同社役員になっていた義彦は下原田地区を廻って電灯の勧誘に努めたという。高山線工事で需要増が見込まれる中、1キロほど上流に第二発電所が計画された。当初は800kWの計画であったが、途中で変更され昭和3年10月に完成したと



篠田電機が関わった旧小坂発電所跡  
篠田貞子氏提供



佐見川第1発電所用水路遺構



佐見川発電所現況(330kW)



保井戸トンネル(現況)

きは260kWであった。この工事資金の支払いを巡って会社側と篠田電機とで争いになり、前後10年に及ぶ裁判を経て敗訴し、借財を抱えて篠田兄弟は事業から手を引いた。佐見川第二発電所は現役発電所として今も稼働している。その後、義彦・敏司兄弟は電気事業を離れ、義彦は砂利の採取や軍用バッテリーの製造、敏司は自動車修理業を営んだ。昭和20年、義彦は56歳で逝去、一方敏司は昭和48年81歳で亡くなった。技術的才能はあったが、経営的には芥見発電所の挫折や佐見川発電所のトラブルに見舞われ、事業家として大成できなかった。(浅野 伸一)